

# 特別講演「ヴァーチャル・ミュージアムの現状と 目指すもの～金沢大学を例として～」

Special lecture

“Present and future of virtual museum, an example case of Kanazawa University”

金沢大学附属図書館長 古畑 徹

Director of Kanazawa University Library FURUHATA, Toru

私は、現在は附属図書館長ですが、2年前までは資料館長でして、この大会を引き受けたのは私でございます。引き受けておきながら逃げてしまっただけで本当に申し訳なかったので、シンポジウムで話すように言われて断ることができず、ここでお話しさせていただく次第です。

## はじめに

金沢大学資料館は2009年度からヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトを開始しました。6年が経過し、現在7年目に突入しています。今までに、12コレクション、1004点の学術資料を公開してきています。ただ、これは今年3月の状況で、その後追加があるので、現在の正確な数はわかりません。昨年作ったものが追加になっており、もう少し増えています。この間、大学博物館等協議会などで幾度も発表させていただき、他の館からもご注目いただき、視察も結構来ていただいています。また、新たな組織や研究プロジェクトも立ち上がっております。この過程をたどりながら、現状と今後の展望についてご報告させていただきます。

話の前に、まず金沢大学資料館のヴァーチャル・ミュージアムを見ていただこうと思います。URLは<http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>です。資料館のホームページからも飛ぶことが可能ですので、そこから飛んでいただいてもいいかと思います。トップページは現在リニューアル中で完全版ではありませんので、その点はご了承ください。トップページには九つのカテゴリーがあり、それぞれのページに入れます。



金沢大学資料館  
Webサイトより

下の方に特別展等の展示会を開いたときの記録も二つほど載っています。画面をクリックすると視点が変わり、いろいろと移動することができます。これについては明日の見学会で、大きな画面で実際に触って体験していただけたらと思いますので、ここでは飛ばします。

例えば「機器」をクリックすると、物理実験機器のアイテムリストが載っています。「マグデブルグ半球」を開けてみます。メタデータが先にずらっと掲載されていて、その後に実物の画像があります。大体六つの写真が載っています。高精細画像なので、生産している会社の名前まではつきり読み取ることができます。実物を見てもよく見えないケースでも、かなりしっかり見えるのが一つの特徴と言えるかと思います。

「標本」をクリックすると、「きのこムラージュ標本」と「皮膚病ムラージュ標本」があります。これも先ほどの例と同じように、メタデータが先にあり、写真が載っています。ただ、皮膚病についてはいろいろな問題点があるため、現在はメタデータだけの状態で、写真は載せておりません。写真自体は準備してあり、どのように載せるべきか検討しているところです。

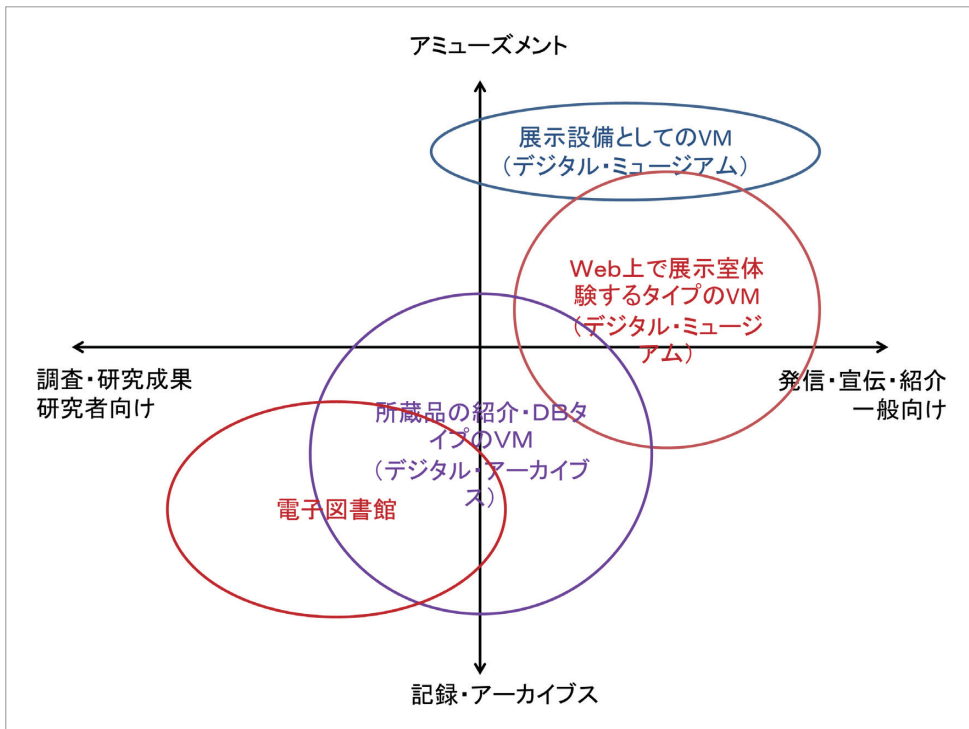
検索サイトで「ヴァーチャル・ミュージアム」と入れますと、いろいろなタイプのものが出てきます。共通項は仮想展示機能があることだと思うのですが、似たような名前前でデジタル・ミュージアムやデジタル・アーカイブスがあり、場合によっては電子図書館も類似のものに入ると思えます。恐らく強調する側面や経緯によって用語が違うのであって、見ていくと、同じタイプのものあれば、同じ名前でも全く違うタイプもあります。ヴァーチャル・ミュージアムと謳うのは、今見ていると、比較的いろいろなものに対応しているもののような気がします。また、図書館などで行っている電子図書館だけでなく、貴重資料のリポジトリを作っているところもあり、そういうものともオーバーラップする部分があります。先週、熊本大学で国立大学図書館協会がやって行ってきたのですが、大学によっては、図書館も博物館も同じようなものを持っているケースがあります。金沢大学の場合、掛図は図書館が持っています。本来これは資料館にあってしかるべきだと思うのですが、そういうところがあちらこちらにあって、その辺でオーバーラップする部分があることも気を付けないといけません。

そこで、どのように分けられるかを考え、分類化してみました。ただ、教育の部分抜いてあるので、本当はもう一つ標軸が要るのかもしれませんが。横軸は一方に調査・研究成果や研究者向けのもの、もう一方に発信・宣伝・紹介や一般向けとして、縦軸は上にアミューズメント、下にアーカイブズという形で図表化してみました。

展示設備としてのヴァーチャル・ミュージアムというのが結構あります。展示している場所でヴァーチャルな空間を映し出すものです。そういったものは、どちらかというとその場で楽しむ部分が割と強く、発信の要素が強いです。一方で、ウェブ上での展示、先ほど奥野先生が言われたようなタイプのヴァーチャル・ミュージアムは、発信・宣伝、アミューズメント、それから展示自体の記録という意味も入ってくるのだらうと考え、この辺に置きました。調査・研究の成果という部分はほとんど入らないでしょう。

それに対して、デジタル・アーカイブズと呼ばれているものや、所蔵品の紹介やデータベースのようなタイプのヴァーチャル・ミュージアムは、記録の要素がかなり強いと思っています。もっと明白になっているのは電子図書館で、記録であると同時に研究者向けという要素が相当強くなっています。これが私の一通りの整理なのですが、これで合っているかどうか自信はありません。ただ、こういうカテゴリーでくくると少しは分かりやすいと思います。

本学の場合はウェブサイト上のミュージアムです。展示室での展示企画としてのヴァーチャル・

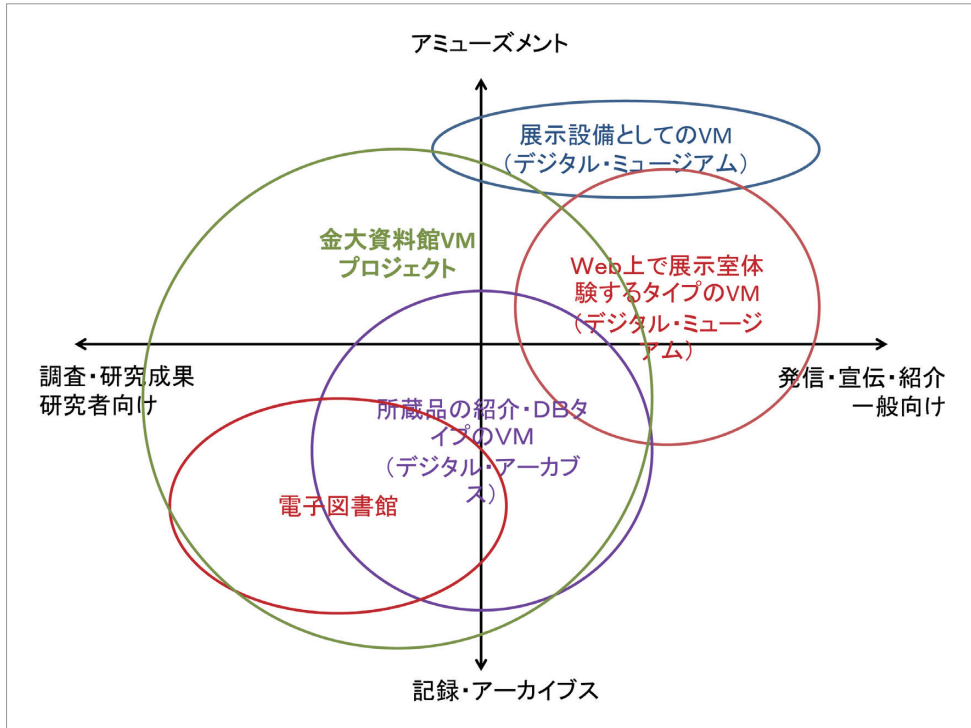


ミュージアムではないのですが、一部、活用はしています。それから、メタデータを結構重視しています。映像・画像重視のタイプではないということをご理解いただけると思うのですが、画像は画像でそれなりに意味がある形で掲載しています。それから高精細画像で、6カ所を多角的に撮っています。1枚ではその存在しか見せられませんが、6枚載せればそこにあるいろいろな要素を多角的に見せることができます。その意味では、アミューズメントと研究の融合をある程度意識しているということです。そうは言っても、やはり研究的側面、アーカイブズの側面の方が強いのが本学のもので、それにはそれなりの理由があり、そこをこれから見ていきたいと思います。先ほどの図面に落とすと、金沢大学資料館のヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトは、この辺りに位置するだろうと思います。

もう一つだけ、前置きとして私自身の紹介をしておきたいと思います。私は東北大学の東洋史の出身で、歴史学、それも文献史学になります。書誌学はある程度やってきていますので、図書の問題は強いですが、博物資料とはほとんど関係がありませんでした。金沢大学へ移ってきて、50年史の編纂室委員をしまして、そのことが恐らく資料館の方へ関わっていった一つの原因だろうと思っています。その過程でこういうことと関わりが深くなり、2009年から資料館長に就きました。ただ、モノ資料の問題については、資料館に実際に来てからある程度知ったという部分があります。以上が私の簡単な経歴です。金沢大学のヴァーチャル・ミュージアムの性格の一部は私の経歴と関わるだろうと思いますので、少し念頭に置いていただければと思います。

### 金沢大学資料館の概要と歩み

金沢大学資料館は、角間北キャンパスの中央図書館の中に付設されています。展示室は図書館の2階フロアの端の方にあり、外から見ると、正面の入り口右側の丸い建物が資料館の展示室です。



資料館の事務室は1階に図書館の事務室と一緒に入っています。展示室の面積は301m<sup>2</sup>ですが、円形なので使い方に難しいところがあります。

この資料館は、1986年、角間への移転に際して「資料館検討小委員会」ができ、そこで基本構想が立てられ、最初に出来上がった施設である中央図書館に付設されて、1989年に開館しました。当時掲げられた目的は、一般的ですが、「本学における学術研究資料を系統的に収集、整理及び保存し、教育研究に資すること」というものでした。

1986年の基本構想は、大学の移転に際して貴重な資料が捨てられることがよくあったために、そこを何とかしようという考え方であったと聞いています。収蔵資料のベースは移転時のものです。さらに、退職した教員などが持っていたもの、あるいはそれに関係して要らなくなったもの等で増加していきました。今は卒業生からのものが届いたりもします。この段階で将来University Museumへと考えて造られたということが当時の書類に出ているのですが、それにしても最初から貧弱で、人員は非常勤職員2名と兼任の館長1名という非常に厳しい状況で始まりました。

1999年に金沢大学の50年史の編纂事業が行われ、資料をかなり収集しました。この収集資料を、事業終了後に散逸しないように資料館が引き取ることになりました。ここから、大学史の資料を、文献的なもの、公文書も含めて受け取れるようになり、文書館機能が付加されることとなります。ただし、機能を付加されても人員はそのままでした。最初とは少し形が変わったのですが、そのままの状態でしたので、2010年、私が館長のときに将来計画と使命を再定義し、今は「学内共同利用施設として、金沢大学（前身校を含む）並びにそれに関係した人々の、学術資料・記録・文書（法人文書を含む）等を収集・整理・保存並びに展示・公開し、関連分野の教育研究活動に資するとともに、金沢大学の管理運営、学生・教職員の自校教育、並びに対外的な社会貢献・宣伝活動等に資すること」となっています。何でもありみたいな文章ですが、一応、大学とそれに関連するものを

## 2. 金沢大学資料館の概要と歩み

- 金沢大学角間北キャンパス中央図書館内
- 大学博物館 (Museum) と  
大学文書館 (Archives) の両機能を有する



集めているという方針を明確にした次第です。

当初は資料も少なく、整理だけで手いっぱいでした。初めのころのものを読んでみると、実際にはほとんど開館していません。まともに活動できるようになるのは90年代の後半からですが、この過程でも順次整備で、諸規程や要項は初めのころはないのです。パンフも発行されておらず、新入生に宣伝するものも持っていないで、『紀要』の発行も、始まっても不定期だったりしています。だんだんホームページの開設や特別展の図録を作ったり、監視カメラを置いたりして、常時開館は2000年以降になります。10年ぐらいかかってしまいました。1992年から2002年の合計入館者数のデータを見ると、10年間で6658人しか入っておらず、初期の段階は非常に厳しかったことがお分かりいただけると思います。

2005年度が一つの転機で、これは博物学会の最初の年に当たります。このころから年間3～4回の展示会、講演会が定例化してきます。入館者数も公表するようになりました。2006年に特別展「四高開学120周年記念展示」のときから、図録の発行もほぼ定例化してきます。2008年に『資料館だより』もリニューアルし、さらに収蔵品の増加に対して収蔵庫の階層化を行って、ある程度、対応もできるようになってきました。運のいいことに、こういう時に館長になったので、私としては非常にありがたく、流れの中に身を置かせていただいたと思っています。

ただ、人員が非常に少ないわけです。そのことを前面に出してしまうとアピールができないので、半年ぐらいは黙っていたのですが、それから少しずつこんな方向で行きましょうということを言いはじめます。若干無理しても、もう少し積極的にアピールしないと、いい方向に向かわないのではないか、頑張っている姿を少しでも顕在化させないと好転しないだろうというのが私の考えでした。

そこで、将来構想を明確化し、入館者も年間5000人を目標としました。また、活動をもう少し定期化して『紀要』の発行を隔年から毎年になりました。それから、学内の競争的経費の獲得にかな



り積極的に動きだしました。資料館の予算は非常に小さく、理系の一つの研究室よりも小さいくらいだったので、それを補う手として一生懸命取り組みました。その過程で臨時職員の追加があり、初めて少し増えたので、動きが取れるようになります。その後、常勤1名、といっても退職された方の再雇用なのですが、それでも1名と非常勤2名。現在、この学会の関係でもう1名パートで来ていただいています、その体制を持てるようになりました。さらに2014年からは、兼任ながら副館長を置いています。人員が少なく、一時期、学芸員科目のサポートも学内の博物館施設ではできなかったところから、これを再開できるようにまできました。結構苦勞しましたが、経費のところから積極展開に至りました。

さらに、大学の対外アピール事業にも積極的に参加するようになりました。3年前に本学の創基150年事業があり、出だしはトラブルがあったのですが、積極的に協力しまして、これも本資料館にとっては非常にプラスになっていきます。同窓会事業への協力連携もさせていただきました。例えば、特別展を150年事業と連動させて行ったり、ホームカミングデーと連動して写真展を行ったり、式典での解説も資料館で担当させていただきました。

学内外でも積極的な情報発信を行い、企画は全てプレス・リリースしていますし、ポータルサイトを使って学生・教職員への情報提供をどんどん行っています。それから、資料館の側に図書館への入り口が一つあり、直に図書が並んでいるところへ入れます。そこは一時期、開かずの扉にして管理していたのですが、そこを開放し、物を持って出ることにはできないけれど、図書館に入ることだけはできるようにしました。いろいろな方々の助言を頂きながら次々とやっていったのですが、その中の一つが、学内の「キャンパス・インテリジェント化経費」に申請した「金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアムの整備・構築」という事業です。

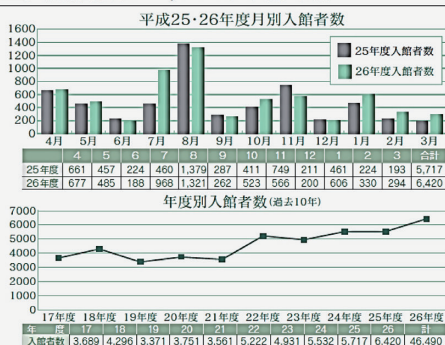
こういうものを展開していった過程で入館者数が非常に増加し、平成26年は年間6000人が入り

## ○入館者の着実な増加へ = 学内外で次第に知られる存在

平成26年度の資料館展示室入館者数が6,000人を突破！

—3年連続で入館者記録を更新—

平成26年度の資料館展示室入館者数が6,420人に達し、過去最高であった25年度の5,717人を突破しました。3年連続での記録更新となりました。これも、皆さんが資料館展示室に足を運んでいただいたおかげと深謝しております。今後とも、資料館展示室がより一層利用されることを目指して頑張りますのでご支援賜りますようよろしくお願いいたします。



297 mm

Kanazawa University Museum Newsletter 1

『金沢大学資料館だより』第47号(2015年5月)

\*現在『資料館だより』は再リニューアルし、年3回発行

ました。こういう山の中にいますと、学生・教職員が中心で、あとはいろいろ訪ねてきた方に入ってもらうという形で、これを見るためにわざわざ来る市民はまずいません。そういう状態から増やしていった結果、かつての10年間の入館者数を、とうとう1年間で入れるというところまで持ってきたということです。

### 初期の金大資料館VM構想

2009年の最初のヴァーチャル・ミュージアム構想について、計画の概要と年度計画のポイントをお話しします。まず、構想のポイント①は、所蔵のデータベース機能と仮想展示、仮想展示だけをヴァーチャル・ミュージアムと呼んでもいいのかもしれませんが、その二つの側面を持っており、第一の機能を前面に出して申請書を書いていることです。そこが他のヴァーチャル・ミュージアムと少し違う特色かもしれません。

その背景には、所蔵品が増えている一方で、スタッフが少なく、予算も少ない、そのために整理が追いつかず目録も作れないという状態があり、これに対応したいというところがありました。

それから、図書館における機関リポジトリがこのころ登場しており、結構普及してきていました。それは電子的な一元管理が可能であり、割と管理が容易だと分かっていたので、同様のものが一回作れば目録等の管理等もやりやすくなるだろうと考え、この辺は割と強調しました。それから、そのころから学術資源のオープンアクセスの流れが出てきており、論文に対しては既に図書館にあった機関リポジトリでアクセスできました。しかし、非文献の学術資源についてはアクセスできるものを持っていなかったもので、これならば重複しないし、時流にも合っているから予算獲得もしやすいだろうと考え、こういうところを盛り込んだ形で出しています。

幸いにして金沢大学は、図書館の方に学術論文のリポジトリはあったのですが、電子図書館あるいはデジタル・アーカイブスと呼べるようなものは持っていませんでした。そこで、ないところを資料館がやるという形で、割と話がしやすかったという面がありました。

構想のポイント②として、仮想展示は社会貢献・情報発信に有効だという説明をしています。ヴァーチャル・ミュージアム機能は仮想展示の方だけを指して説明したりもしていました。この背景には、まず仮想展示が当時の博物館の流行になってきていたことが言えると思います。科学博物館などもヴァーチャル・ミュージアムの用語を使用していたため、「科学博物館がやっていますよ」という話をする、非常に説明しやすかったわけです。

また、法人化後、国立大学では社会貢献・情報発信が非常に重要だという方向で動いていたので、そのためのツールへの関心の強い時期でもありました。そこで、資料館に面白いものがあるのに、展示室が狭くて十分展示できない、あるいは面白い展示をしても場所が悪くて市民が来にくい。それに対して仮想展示が活用できるのではないかという形で話を進めていきました。

構想のポイント③として、研究開発しながら構築するというのを挙げており、その分だけ時間がかかるような想定で組んでいます。7年間というのはそういう形です。背景には、研究と結び付けることで大学博物館らしさを示そうという意図がありました。研究シーズの可能性を提示することで説得力を持たせようとしたわけです。もう一つ、既に北陸先端大と金沢大学の研究プロジェクトがあり、後ほどパネラーで話していただく堀井先生は、当時、北陸先端大の助教で、堀井先生を中心にした「遍（あまね）プロジェクト」が動いておりました。そこで研究資金を獲得したり、金沢大学との共同研究が行われたりしていたので、この辺をバックに話を進めると、研究開発をするということにもそれなりの説得力を持たせることができました。

それで採択を受けたのですが、やはり大学側としてはデータベースよりも見せることや発信することの方に期待が強かったような気がします。ですので、申請書もそこを強くしたところもあるのですが、結構この側面が強く要求され、後の方はその部分に引っ張られたところがあります。とはいえ、最初からデータベースの部分が割と強かったことが、本学資料館のヴァーチャル・ミュージアムが現在の形になった前提としてあるとご理解いただければと思います。

### 金大資料館VMの展開

では、ヴァーチャル・ミュージアムをどう展開したのか。2009年度は打ち合わせから入ってきますので、少ししか作っていませんが、三つぐらいのプロジェクトから動かしていきました。このときに、画像1個ではあまり意味がないということで、6カ所の違う角度から撮って見せるということと、高精細画像を使うということを決めています。平面のものならば角度は幾つも要らないのですが、物理実験機器などの立体を扱うとなると、やはりいろいろな角度から撮って、その角度にいろいろな意味があったりするので、それを考えながら撮らせていただきました。そういう方向を最初から打ち出したということです。翌年にはメタデータ形式をDublin Coreをベースにしながら検討し、その形を日本語でどういうふうにするかを確定していきました。

2011年度には、図書館から貴重資料リポジトリ(電子図書館)を作る計画が、先述のインテリジェント化経費に上げられました。査定する側からは「類似のものでしょう。できれば統合してください」と言われたのですが、この年は統合できず、共同で作業しながら少し低い予算でできるようにしました。この辺になると、かなり物が増えたので全面公開を始め、スマートフォン対応も行いました。

2012年には、前の年のいろいろな協議を踏まえて、やはり図書館と別々にやるのは無駄だろうとかなり言われたので、図書館のものを吸収する形で統合しました。資料館に限定しないこともあって、プロジェクト名を「金沢大学所蔵貴重資料のデジタルアーカイブ公開システムの整備・構築」へと変更することになります。この辺から全学的な資源リポジトリ、全学的なヴァーチャル・ミュージアムへの発展をかなり意識しながら動いていきます。

2013年度からは、少し形を変更したり、セミナーを行ったりして、2014年度には映像によるミュージアム・コースを試作しています。予定変更などにより前年度までに全ては終了しなかったもので、1年延長という形で今年度まで来ているという状態です。

このように展開してきたのですが、もう一つ、実は脇の展開があります。それが学術資源リポジトリ協議会で、ご存じの大学、加わっていただいているところもあるかと思います。2011年に、金沢大学資料館のヴァーチャル・ミュージアムを推進した主要メンバーを軸にして、非文献資料リポジトリ研究会を立ち上げました。「大学の枠組みを超えた非文献資料のための機関横断的なリポジトリの構築を目指す」ということで、要するに、資料館のヴァーチャル・ミュージアムで実験をしてきたことを、さらに全国的に展開するためのものです。翌年、学術資源リポジトリ協議会に発展し、三つのポイントを付けています。これについては、後ほど堀井先生からお話いただきたいと思います。そして2014年に一般社団法人化しました。

現在公開しているコンテンツは、教育掛図資料という形で、三つの資料館・図書館のものがあります。これは大学で区切られているのではなく、教育掛図資料という枠組みで探すことができ、そこが一つの特徴になります。科学実験機器資料も同じようになっています。教育掛図も実験機器も、金沢大学資料館にもかなりのものがあります。掛図の方は図書館にあるのですが、実はこれらとのリンクができていません。ここが一つ課題になるだろうという気がしています。教育掛図について



は、四高の教育掛図だけが、現在、金沢大学のヴァーチャル・ミュージアムの中に入っているのですが、実はこれとは別の場所に大量に入っています。ご存じでしょうか。京都大学の図書館のホームページを開けると、金沢大学の四高の教育掛図のページがあり、そこに大量に載っています。むしろ見栄えのするものはみんなそちらに載っていて、われわれとしては非常に寂しいのです。

これは、われわれの大学の中で先にこの研究をしたのではなくて、京都大学の先生の方が科研費を取って研究されて、写真を撮られて持ち帰られたわけです。研究資料として公開された形を取ったので、京都大学で公開になっています。こういう在り方は、本当は大学としては好ましくないのですが、やむを得ないと思っています。むしろ、こういうものとのリンクがきちんと貼れていないのが本当の問題だろうと思います。

• 学術資源リポジトリ協議会で公開しているコンテンツ

①教育掛図資料

石川県立自然史資料館所蔵(126件)

大阪教育大学附属図書館所蔵(61件)

奈良教育大学附属図書館「明治教育文庫」  
(221件)

②科学実験機器資料

新潟大学所蔵(20件) 神戸大学所蔵(21件)

東京大学駒場博物館所蔵(22件)

石川県立自然史資料館所蔵(753件)

大阪教育大学附属図書館所蔵(3件)

\* 金沢大学資料館VM

教育掛図: 四高221件(今後も追加)、医学61件

実験機器: 四高269件

金大資料館VMの目指すもの

以上、現状をいろいろお話しし、どのように展開・発展してきたかもお話ししましたが、スタートは金大資料館のヴァーチャル・ミュージアムという形から入っています。しかし、途中から図書館のものとの組み合わせも入り、先ほどの皮膚病ムラージュ標本は実は金沢大学の医学部記念館で持っているもので、こういったものを組み込んだ金沢大学全体の学術資源の博物資料系統のミュージアムという方向へ動いています。動いているのですが、学術資源は資料館以外にもいろいろな場所にあり、他のセンター等にもまだまだあります。そういったものを組み込んで、当初から逆風はあったのですが、今は図書館と医学部記念館の資料を掲載して、全学展開の方向へ来ています。

ただ、まだ「金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム」で、まだ金沢大学ヴァーチャル・ミュージアムの公式名称は得ておりません。これからもう少し説明をして、きちんとそこへ持っていきたい

いというのが、当初からの私の思いです。さらに、名称変更すると、あと二つ大事な意味があります。一つは、対外アピール度が違ってくることで、資料館でやっているというレベルではなく、大学全体のものというアピール度が出てきます。これは一つ意味があると思っています。

もう一つは、オープンサイエンスという問題と関わっていると思っています。これはお話しするつもりはなかったのですが、先週、熊本であった国立大学図書館協会（国大図協）総会でオープンアクセス・オープンサイエンス関係の話がずっとあり、そのときに初めて気が付いたことがあります。内閣府は、今年3月30日に「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」報告書を出しました。その中で「公的研究資金による研究成果のうち、論文及び論文のエビデンスとしての研究データについては、原則公開とし、その他研究開発成果としての研究データについても可能な範囲で公開することが望ましい」と書かれています。このことは既に知られているだろうと思うのですが、この中で「公開適用の対象となる研究データは、メタデータ、数値データ、テキストレコード、イメージ、ビジュアルデータなどの多様なデータが含まれる」とあります。私はこれを最初に読んだとき、ここで言っている問題は理系の研究成果のことであるという思い込みをしていました。ところが、国大図協へ行ったら、人文社会科学に関して図書館等で所蔵する貴重資料のデジタル化は、これに該当すると言われたのです。ですから、研究者が使っている資料の中で、重要な資料のデジタル化を、これを通して行っていく方向にあるという指摘を受けました。

オープンサイエンスに対応したオープンデータの流れは急速に加速するものと予測されています。各大学で、今、機関リポジトリ、論文のものは持っているのですが、やはりデータを載せるデータリポジトリの整備が必要であるということが提言の中にも入っています。調査によれば、アメリカなどは、機関リポジトリはかなりのところを持っているのですが、データリポジトリはまだ半分にまでなっていないようでした。このデータリポジトリには実験データ、モノや場所の調査のデータ、人文科学系の史料・古文書・古典籍などが入るのだそうです。さらに、研究に使用した絵画・写真・地図等のデータなどが入ってくるということです。

そうなってくると、金沢大学ヴァーチャル・ミュージアムとすることで、実験データはヴァーチャル・ミュージアムに必ずしも入らないと思いますが、実験データ以外の部分は対応可能なデータリポジトリへと成長する可能性も持っているかと思います。ただ、古い実験データの画像ならば、あるいはかつての研究成果としてヴァーチャル・ミュージアムの対象になるのかもしれませんが。この辺で、モノを扱う大学博物館の可能性として、今までとは少し違う向きがあるのではないかと思います。今後の検討課題で、動向を見ながら考えなければいけないところだと思います。それから、図書館との役割分担をきちんとしていかなければならず、そのこともこれから考えていくときの一つの条件になるだろうと思います。

最後に、この問題と関連して、もう一つ英語化という課題があります。今まで情報発信の対象は、金沢大学も典型的にそうだと思うのですが、地域貢献とか、よく知られるところで受験生の確保とか、実際に資料館はオープンキャンパスをやると人が来る場所の一つになりますが、それを外側から見てもらえたらいいねという話になるわけです。そういう方向でものを考えてきて、地域の人々や受験生にという発想は割とあったように思います。

そうすると、結局、日本語だけで十分というか、日本語はむしろ必要という状態です。しかし、オープンアクセス・オープンサイエンスと関連付けていくと、研究者を含む研究に関心のある世界の人々が対象になるのは当然のことです。実際に、特別展を開くとき、いろいろな資料を探していくときに、アメリカなりドイツなりのデータを探して、持っているものと突き合わせながらその価

値を確認していく作業を結構やってきたことを思い出します。英語で書いてあると読めるので、大学にこういうものがある、博物館にこういうものがある、それはどういう価値があるのかがあらためて分かるということが確かにありました。それは外国からわれわれが確認しているだけで、われわれからは発信していないということにそのときは全く気が付いていなかったのですが、あらためてこの必要性もあるのだと思います。メタデータ等の英語化は今後必須になっていくというのが私の理解です。ここにさらなる発展や注目の余地もあるのではないかと思います。

以上、雑ばくな話で申し訳ございませんでしたが、ご清聴ありがとうございました。